

### 第3回国際細胞生物学会議を主催して

沖 垣 達

重井医学研究所細胞生物部門

世界53ヶ国から、細胞生物学および関連分野の研究者2,600名が参加して、8月末東京で開かれた第3回国際細胞生物学会議(ⅢICCB)は、多大の成果をあげ予定通りしかも好評裡に閉幕した。積極的に参加され、あるいは準備期間の当初から御助言を賜った在岡の諸先生に心から御礼を申し上げたい。

思えば4年前にBerlinでのⅡICCBに出席し、その席で満場一致の決定をうけて日本開催を受諾した時点では、私達には計画も資金も皆無であった。会場候補地が京都、神戸、東京と変わる毎に、私達は足で歩いて好条件を求めたものだった。やがて正式に組織委員会が発足し、会長にわが妹尾左知丸所長が就任され、半ば自動的に事務局は岡山ということになった。申すまでもなく、日本で開催される年間100件を越す大小の国際会議の大半は東京か京都で行われており、事務局は当然東京あるいは関西の国立大学内に置かれるのが、過去においてはいわば慣習になっている。

しかし私達の場合には、会場は東京、事務局は岡山、しかもそれが小規模な研究所とあってやはり必要以上の注目を浴びることになった。これも地方都市の国際化という風潮や、交通網の発達などの条件にかかわったことだが、しかし未経験の当事者にとっては重責以外の何ものでもないことであった。最も私にとっては長年の海外生活で体得した仕事のシステム化や、秘書の使い方などを具体的に実証する実験としてはかけがえのないものではあった。現実には、私は3人の委員長(東京・大阪・京都)を定期的に訪問し、合わせて募金依頼のため多くの企業を訪問する数年を送ることになる。

さて、東洋ではじめてのこの会議は、開会式に始まって午前8時半から深夜11時までというまことにエネルギー的なprogramが組まれ、またレ

ーザービームの交錯する広場でおみこしをかついだりディスコに興ずることもできる国際親善の会でもあった。

皇太子殿下、ならびに妃殿下の御来臨をいただいたNHKホールでの開会式は日本的に厳粛に始まったが、開催母体の国際細胞生物学会連合Brinkley会長(米国Texas出身)の「皇太子殿下、妃殿下、御来賓ならびにTexasの皆さん。」という挨拶で会場は一瞬のうちになごんだものになった。おかげで、皇太子殿下のお言葉と来賓祝詞の同時通訳の榮に浴した私も、緊張することなく大任を終えることができた。続いて鳥取で生まれ育ったH.S. Bennett博士(North Carolina大名誉教授)の開会講演「日本の細胞生物学の夜明け」は多くのスライドと流暢な日本語が飛び出して、特に日本の歴史にうとい海外からの参加者に多大の感銘を与えた。

一日一題宛ての早朝の特別講演も予想にたがわず多数の聴衆を集めることができた。まずFranceのN. LeDouarinは異種間キメラ(ニワトリ×ウズラ)における神経堤細胞の分化の本質について女性らしいきめの細かい発表を行い、司会の江橋教授によって「細胞生物学の父」と紹介されたK.R. Porter(U.S.A.)は立体スライドを駆使して細胞内の物質移動について明解な話をされた。D.D. Brown(U.S.A.)は、真核細胞の遺伝子の発現の分子的機構について核心にせまり、S. Tonegawa(U.S.A.)のT細胞の3種のセプターと、この分野の将来像に関する講演は聴衆を魅了した。

連日5会場で並行に進められたsymposiumは、遺伝子とその操作、細胞膜、細胞内小器官、細胞骨格、細胞運動、細胞病理学、細胞社会学、新しい技法などの主題のもとに実に53 session、招へい演者は18ヶ国から370名の多きに達した。一般演題は上記主題に添ってすべてposter発表とし、5日

間に渡って総計1,250編の発表が行われた。これらについてここでは多くを報告することはできないが、この冬から1985年にかけて相当数の生物科学関連雑誌が特集を企画してくれているので、詳細はそれらに期待したい。

会期前後には種々のsatellite meeting や小集會が持たれたが、そのひとつに「Asian Pacific Cell Biologist's Gathering」がある。これは私達事務局の肝入りで行われたもので、11ヶ国から35名が参加し、将来における東洋諸国間のこの分野における相互協力を具体化する発起人會であった。当面は私達が計画起案をすることになり、目下Asian-Pacific Cell Biology Organization (仮称) の規約作りを開始した所である。

国際會議は場合によっては辛辣な討論を生み、今回もその例外ではなかった。と同時にそれは新しい友を得る場でもあり、旧友たちとの再會の宴でもある。私個人は、米国在住中にCaliforniaとWashington間の長距離電話だけで共著論文を書いたしかし面識のないNIHのRhim博士と、十年目に初対面する機会に恵まれた。二人は肩を抱きそして涙した。特別講演に招へいした利根川博士は、會議後間もなく文化勲賞の榮に浴して再来日した。

ちょうど同じ頃、死を承知で鎮痛剤を打ちつつsymposiumの座長をつとめられた大阪大学の垣内史朗教授は静かに永遠のねむりにつかれた。国際會議は華かにしかもスムーズに進行したが、その裏には喜びと悲しみが交錯して、それはまさに人間模様のおりなすひと駒でもあった。

今、残務多忙とはいいいながら、あの忙しかった秒きざみの日々からみると、潮が引いたような空間の静寂の中に私はいる。果して多大の費用とエネルギーを必要とした国際會議が、人類にとって本当に意義のあるものであったかどうか、私は自問する。4年後の主催国Canadaの委員たちは、今何を考えて動き出そうとしているのか、私は同情する。しかしこの4年間を私は決して雑用に明け暮れたとは思っていない。誰かがしなければいけないことを、自分の責任において押し進めた4年間は、私にとって過去のいずれの時期よりも充実したものであった。それがもし真夏の夜のはかない夢であったとしても、私にとってはやはり美しい夢なのである。

(ⅢICCB 事務局長, 研究会理事)